東京都江戸東京博物館研究報告　第５号　2000年２月
Journal of Edo-Tokyo Studies, NO.5, P. 1 -24, February, 2000.

特集　「不思議」を楽しむ――江戸のメディアと俗信――【論　文】

有卦絵について

矢　島　　新*

目　次

はじめに
1　有卦無卦説の概要と日本への伝播
2　有卦に関する近世の文献
3　有卦絵の遺品
4　有卦絵の特色

キーワード　有卦　無卦　宗教的浮世絵　めでたさ　ふ尽くし　福助　福禄寿
陰陽五行　歌川国芳　迷信　大雑書　嘉永２年

はじめに

浮世絵は一般に、遊廓や芝居といった市井の風俗――聖に対する俗――を描くものというイメージが強く、聖なるものを描く宗教画とは反対の極に位置するものととらえられている。もちろん遊廓や芝居は浮世絵の大半を占める主要なテーマであるし、浮世絵がそこから始まったものであることも疑えぬところであるが、産業としての浮世絵が隆盛に向かう中で、次第に風景画や花鳥画、戯画や遊び絵、さらには本稿で取り上げる有卦絵のような宗教的主題を扱うものに到る広範な画題を取り上げるようになるのもまた事実である。浮世絵は江戸庶民の日常生活に深く結びつきながらその領域を広げていったのであって、信仰的要素が江戸の庶民生活に不可欠なものであった以上、浮世絵がこれを取り上げるようになるのは極めて自然な成りゆきであったと思われる。有卦絵のような宗教的主題を扱うものは、膨大な数が残る浮世絵全体の中ではあくまで少数にとどまるが、庶民の日常生活への密着度という点で、無視することのできぬ重要性を持つと考える。

極めて安い値段で購うことができた浮世絵は、たとえ宗教的な主題を扱うものであっても基本的には消耗品であり、当時版行されたもののほんの一部が遺るに過ぎないが、それでも福神図、麻疹絵、鯰絵などは、今日もかなりの数を見ることができる。社寺が発行した墨摺りのお

*渋谷区立松濤美術館学芸員

札の類を含めれば、木版印刷によって庶民層に行き渡った近世の宗教画は、中世に数倍するであろう。そして単に数の問題だけではなく、そこには庶民の信仰に根ざした、伝統にとらわれぬ新しい宗教表現が認められる。もちろん古代から中世にかけて制作された、高い作画技術によって崇高さを表現しようとした伝統的な仏画とは表現の内容が大きく異なっており、それらと同列に論じることはできないが、日本の宗教絵画史を考える上で、庶民の素朴な宗教観が反映された近世的な宗教絵画として、宗教的主題を扱う浮世絵を等閑視することはできないだろう。

宗教的主題を扱う浮世絵はその内容が実に多彩であり、まだ総体を論ずる段階には到っていないのだが、一つの重要な要素として、「めでたさ」の表出ということが挙げられるのではないかと考えている。福神図と有卦絵がその代表的な例であるが、福神図については先学の論考も多く、かなり研究が進んでいる。ところが一方の有卦絵については、近世後期を中心に大量に版行されたものであるにも関わらず、ごく少数の愛好者に知られるのみで、いまだ十分な研究がなされていないのが現状である。筆者が所属する渋谷区立松濤美術館では、平成10年(1998)８月から９月にかけて「江戸の遊び絵――遊びと祝いの浮世絵の世界――」、翌平成11年(1999)の６月から７月にかけて「浮世絵師たちの神仏――錦絵と大絵馬に見る江戸の庶民信仰――」という特別展を企画し、それまで紹介されることの少なかった宗教的主題を扱った浮世絵にスポットを当てようと試みたが[1]、有卦絵がまとまって紹介されたのは、おそらくこの二つの展覧会がはじめてであったものと思われる。

有卦入りを祝うという習俗は現在全く行われていないものと思われるが、有卦入りを祝う浮世絵（有卦絵）が多数遺されているという事実は、江戸時代後期から明治初期にかけてかなり盛んに行われたものであることを推測させる。ところがこの習俗は、その後わずか100年ほどの間に近代化の波間に消えて、ほとんど知る人もないほどに忘れ去られてしまうのである。今となっては遺された有卦絵から当時の習俗の実態を推測する他はないが、その究明は宗教絵画史研究のみならず、江戸の庶民信仰を考える際にも、貴重な事例を提供するものと考える。有卦絵に関する調査は現在まだ新しい資料が増えつつある進行途中の段階にあるが、今与えていただいた機会を生かして、筆者が上記の展覧会を通してこれまで有卦絵について知り得たことをまとめてみたい。

1　有卦無卦説の概要と日本への伝播

有卦無卦説とは、幸運の時期（有卦）と不運の時期（無卦）が12年の周期で繰り返すとする迷信である。生まれ年の干支の納音によって人を木性、火性、土性、水性、金性の五つに分かち、木性であれば酉の年酉の月酉の日酉の刻より７年間の有卦に入り、その後の５年間は無卦に入るという。同様に子年には火性、卯年には金性、午年には土性と水性と３年おきに有卦入

りがあり、有卦入りする人に、頭に「ふ」の付くめでたいものを贈る風習があった。信仰というより迷信に類するものではあったが、不安な世情が続いた近世後期には、わずかな幸せを願う庶民の心を反映するように、福助や福禄寿といった頭に「ふ」の付くもので構成されためでたい有卦絵が、福を倍増するものとして大量に売り出されたのである。

納音とは60ある干支のそれぞれに配された五行（木・火・土・金・水）を言う。単に甲（木の兄）であれば木性とされるのではなく、甲子は金、甲戌は火、丙午は水などとかなり分かりにくい法則に基づいて決まっている[2)]のだが、近世の大雑書類の記述がこの納音に基づくものであったことよりみると、当時かなり人口に膾炙した五分法であったと思われる。また、たとえ自分の生年の納音を知らなかったとしても、多くの有卦絵にはその年に有卦入りする人の年齢が列記されていたので、自分が有卦入りに該当するかどうかは容易に知ることができた。

この有卦無卦説はもちろん中国の五行説に起源があり、隋の蕭吉の撰になる『五行大義』[3)]に、この説の元となった詳しい記述がある。その説くところは12月のサイクルを人の一生になぞらえるもので、五行のうちの木（性）を引用すると、「木受気於申、胎於酉、養於戌、生於亥、沐浴於子、冠帯於丑、臨官於寅、王於卯、衰於辰、病於巳、死於午、葬於未」、すなわち（12の運気が）受気、胎、養、生、沐浴、冠帯、臨官、王、衰、病、死、葬の順で移り変わり、それが申に始まり未に終わる十二支のサイクルに一致するというのである。後代の有卦無卦説では、胎から王までの７運を有卦（引用した木性では酉から卯まで）とし、衰から受気までの５運を無卦と考えるので、『五行大義』の12運を有卦説に当てはめれば、木性の有卦入り（胎）は酉である。同様に火性は子、金性は卯、水性は午、土性は子に有卦入りする（胎する）ことが記されている。

この『五行大義』の記述で問題となるのは、12運のサイクルが本来は12年ではなく12月のサイクルに関するものであること、有卦と無卦の二分法ではなくあくまで12運を説くものであること、土性を水性と同一とする後代の有卦無卦説とは異なって、土性を火性とほぼ同じ（子に胎する）サイクルに当てること、の３点である。

『五行大義』は中国では宋代以降散逸してしまったというが、類似する説が唐代の袁天綱が著したという『三世相』や、明代の王圻の撰になる『三才図会』に見える。『三世相』では『五行大義』同様の12運を説く[4)]ものの、土性を日本近世の有卦説と同様の水性と同一のサイクルに改めている。同書は嘉靖19年（1540）に上梓され、近世になって我が国に輸入されて日本の雑書類に大きな影響を与えたといわれている。

『三才図会』では12運を説いておらず、代わりに有気（有卦ではない）の語を用いて簡略な吉凶の二分法を示している点が重要であるが、ここでの有気は生から王までの５運を指しており、胎と養を含めた７運を有卦とする後代の有卦説とはやや異なっている。また、無卦（無気）については述べずに『五行大義』のいう葬のみを入墓の表現で特別に記す[5)]点と、やはり土性を火性ではなく水性と同じサイクルに当てる点が注意される。

『五行大義』は我が国に早く輸入され、『続日本紀』に記される天平宝字元年（757）11月の勅には、陰陽生の必読書として『周易』、『新撰陰陽書』、『黄帝金匱』と並んでその名が見えている。従って『五行大義』が古代より陰陽家にきわめて重んぜられていたことは間違いない。

その後我が国で撰述された陰陽書を見ると、鎌倉末期の成立という『簠簋内伝』[6]には、「十六、五墓日沙汰事」の項に、『三世相』と同じく土性を水性と同一サイクルに当てる12運が記されている。ただ標題にも示されるように、その要旨は12運のうちの墓（五行大義の葬に当たる）をことさら忌むところにあって、有卦無卦説のような二分法的な考えは示されていない。

ところが室町時代長禄２年（1458）に成立した『吉日考秘伝』[7]になると、「第五十六、十二運」の項に『五行大義』の12運説がほぼそのまま引用され、さらに臨(官)、王、胎、養、長、冠(帯)の６運を吉とし、衰、病、死、葬、絶、沐（浴）の６運を凶とする二分法が記されている。有気あるいは有卦の語は使われていないが、沐浴を吉に改めれば、そのまま有卦無卦説につながる内容である。

このように、『五行大義』に源を発する12運による吉凶の判断法が古代より我が国の陰陽家に知られていたことは間違いなく、室町中期には近世の有卦無卦説にかなり近い説が登場している。ただ、実際に有卦入りに関する行事が行われていたのかどうかは不明である。

2　有卦に関する近世の文献

「うけ」という言葉の文献上の初出は、最古の大雑書(大ざっしょ)と言われる寛永９年(1632)版の『大雑書』[8]であろうと思われる。すなわち同書第上八十六に「うけむけの事」の項があり、「木性ハ酉いぬいねうしとらう　是七年うけ吉/たつミむまひつじさる　これ五年むけあし(以下火性、土性、金性、水性と記述が続く)」と記されている。土性と水性を同一サイクルとするのは『簠簋内伝』の説くところと同一であるが、12運の詳細は説かずに、同書には見られなかった「うけ・むけ」という言葉を用いて、簡便な吉凶の二分法を説いている。７運を「うけ」、５運を「むけ」とする日本近世の有卦無卦説の初出である。大雑書は江戸庶民の日常生活の指標と言うべき存在であったが、その最古の版本と言われる寛永９年版に、近世後期に盛んとなる有卦無卦説と同一内容の記述が既に見られることはきわめて重要である。ただここでは仮名で「うけ・むけ」と記されているので、後に常用される有卦であったのか、『三才図会』の記す有気であったのかは判断できない。

この寛永９年版『大雑書』を皮切りに、有卦という語は近世の文献に頻繁に登場するようになるが、『古事類苑』等の先学の業績を参照しながら、主要な記事を以下に年代順に記してみると、まずこの最古の大雑書と同じ寛永９年の刊行である『尤の草紙』[9]に、「うけ振舞に鶴かめや」という記述が見える。この「うけ振舞」の内容ははっきりしないが、有卦に関わる何らかの行事が行われていたことが推測される。

川越の塩商人の日記である『榎本弥左衛門覚書』[10]には、「慶安四年卯年二月七日の卯之刻、我等うけに入り申し候」とある。京を遠く離れた関東の庶民層にも、17世紀半ばの慶安4年(1651)には有卦入りを祝う習俗が伝わっていたことを示す貴重な記事である。

文芸作品では、西鶴の『好色一代男』(天和2年・1682)に「然も明後日より金性の者は有卦に入まする年の七年は仕合と申侍る」(巻二「十四歳はにふの寝道具」)というくだりがある。上方での有卦習俗の広がりがうかがえる。有卦の文字が使われた早い例でもあろう。

有卦無卦説の一般への流布に、大雑書とともに大きく関与したと考えられるのが、貞享2年(1685)の改暦である。渋川春海による貞享暦は我が国初の固有の暦として史上に意義深いものであるが、貞享暦では毎日の干支の下に納音が記されるようになり、『貞享解造暦集要』には五性それぞれの有卦入りの年月日刻が記されている[11]。当時庶民が正式な暦を眼にする機会は限られていたであろうが、この貞享暦によって、有卦に関する知識は確実に広まったものと思われる。

識者への知識の普及に関しては、元禄12年(1699)の一色時棟による『五行大義』の公刊も見逃せない。『五行大義』はこの100年後の寛政11年には佚存叢書に収められて、中国へも逆に輸出されている。

以上のように、18世紀の初めには有卦に関する知識はある程度流布していたものと思われ、「うけに入りたりとて商売ひろく致して身代つぶ」[12]す者もいたほどであったが、当時の習俗の実体についてはほとんど明らかにすることができない。その具体的な資料が増え始めるのは、18世紀も半ばを過ぎてからである。

まず有卦入りの習俗の一端をうかがわせる資料としては、大和郡山藩主であった柳沢信鴻が江戸隠居後の身辺を綴った『宴遊日記』[13]がある。この日記には、安永3年(1774)5月6日(土・水性)、同6年8月16日(木性)、同9年11月14日(火性)、天明3年(1774)2月6日(金性)と四度の有卦入りについての記述があるが、信鴻自身も該当した安永9年(1780)の有卦入りについてが最も詳しい。それによれば、信鴻はやはりこの日に有卦入りする俳句仲間の姫路藩主酒井忠以に「魚物野菜等の上にふの字付たる品七種手紙にて遣ハ」している。信鴻も忠以から「不字さかな七品」を貰ったほか、多くの人から瓢(ふくべ)、福寿草蒔絵、鮒、富士嶋台、風通帯、福字土器、藤色襦袢、蓋物、風鈴、笛、吹寄菓子、筆、二股葡萄、不老酒、麩といった、実に様々な頭に「ふ」の付く物を贈られている。この日記に記されるのは上流武家社会の事例であって、当時どの程度の範囲で行われていた習俗であったのかは分からないにしても、「ふ」の付く物の贈答が近世半ばに実際に行われていたことが確認される。先述の『尤の草紙』が記す「うけ振舞」も、このような「ふ」の付く物の贈答であったのかも知れない。有卦に関する江戸時代の考証としては『古今要覧稿』[14](天保13・1842年)が最も詳しく、『五行大義』をはじめとする多くの文献に当たって正確な記述に努め、本来「有気」と書くべきといった正当な主張もしているが、「ふ」の付く物7種を供える風習については由来が分からぬ、と述べている。

この頭に「ふ」の付く物を贈る風習は、その後有卦舟という造り物の贈答に発展したらしい。有卦舟とは、帆柱を筆、船体を紙や経木で造り、二股大根や富士山などの「ふ」の付く物をかたどった菓子を載せた縁起物である。人形で有名な吉徳が明治40年頃まで舟の本体を造り、菓子屋に卸していたという[15]。

また、深川の不動明王と冬木弁天、柳嶋の普賢菩薩、水神森の舟玉、浅草の富士山と風雷神、田畑の福禄神という頭に「ふ」の付く七所を有卦入り後一月以内に廻るという有卦入七福めぐりと称する習俗もあったようである。この七福神詣でに似た習俗について記すのはやや時代の下った明治３年（1870）の有卦絵（図１）であるが、そこにはこの習俗が文化元年（1804）に遡ると述べられている。

図１　芳幾筆「有卦入り七福めぐり」　個人蔵

有卦が雑俳や川柳に詠まれたり、歌舞伎のせりふに登場するのも18世紀に入ってからである。『当世俳諧楊梅』[16]（元禄15･1702年）に見える「有卦に入るとや五月午の日」という句が早い例と思われるが、18世紀後半になると、『かつら藤』（明和５・1768年）に見える「酉年酉月酉刻うけにいる。とり尽晴ゆく空の秋来ぬれ」や、『柳多留－四』（明和６年）に見える「娵のうけ姑のとん死一つ知れ」といった句をはじめ、その例は枚挙にいとまがない。歌舞伎では『助六廓夜桜』に「女は氏なうて玉の輿、こなたは有卦に入ったらう」、『霊験曽我籬』に「親子とも有卦に入ったとはこの事」というせりふがある。

3　有卦絵の遺品

以上のように、有卦入りを祝う習俗は18世紀の半ばには庶民に浸透していたものと思われるのだが、絵画についてもやはりこの頃から遺品が確認される。筆者が知る最も古い絵画資料は

宝暦14年（1764）の朝鮮通信使をモチーフとした絵暦で[17]、これには「木性の人むけのあけ仕合よく成ル　火せうはむけの二年目しんじんすべし　土水の人うけの三年め□□によし　金性ハうけの六年め大ニ吉」（□は難読箇所）と記されている。有卦入りを祝うめでたい有卦絵ではなく、暦に必要な項目の一つとして有卦を伝えるものと言える。

有卦入りを祝う有卦絵としては、鈴木其一が文政５年（1822）の土・水性の有卦入りに際して描いた「富士図」（個人蔵、図２）がある。富士と水面の逆さ富士の間に「ふ」の字で表した三羽の鳥を配する絵柄で、師の抱一が「有卦の祝ひにふの字七を一句のうちに入て/三布に寐る扇枕や不二ふたつ」の句を寄せており、絵と賛でふの字尽くしになっている。

この其一画のような肉筆画はかなり珍しい存在で、有卦絵のほとんどは一枚刷りの錦絵である。筆者が確認したものだけでも100点に近いが、実際にはこれに倍する有卦絵が出されたものと思われる。それらは「ふ」のつくもので構成されるという一点が共通するものの、構図もモチーフも実に様々であり、めでたさを演出する絵師の趣向が楽しい。

まず筆者が知る最も古い一枚刷りの有卦絵の作例は、国芳筆の「三宝に坐る福助」（個人蔵、図３）である。三宝に坐った福助の前に、藤、福寿草、蕗の鉢がおかれ、その下で遊女が筆で文を書いている。後の多くの作例に記されるその年に有卦入りする年齢の一覧はないが、２月８日の日付によって天保２年（1831）の金性の有卦入りに際して描かれたものであることが判明する。

この国芳画は一枚刷りの有卦絵としては飛び抜けて古い。今後の調査で天保期の作例が加わる可能性があるが、現在のところ次に続くのは弘化期（名主単印）の三代豊国筆「うけ祝ひ句競」（神奈川県立歴史博物館蔵、図４）と、嘉永期（名主双印）の国芳筆「うけニ入ふの字尽」（個人蔵、図５）である。この両者は有卦絵の定型確

図２　鈴木其一筆「富士図」　個人蔵

図３　国芳筆「三宝に坐る福助」　個人蔵

図４　三代豊国筆「うけ祝ひ句競」　神奈川県立歴史博物館蔵

立以前の初期的様相を示しており、前者は三枚続きの大画面の上部に有卦に関わる句を15首書き込み、下部の人物群に富士や藤、二見浦の絵などの「ふ」尽くしをあしらうのみで、有卦入りの年月日や年齢一覧などは記していない。後者も、ふらせる、深草少将、富士みやげ、風流人、淵、船、吹き玉屋、ふってくる、深編み笠、踏み止める、ふろしき包み、富士額、ふくらます、という「ふ」の付く13の事物や動作のみを描いている。なお、名詞ではなく「ふ」で始まる動詞が描かれるのは珍しく、後の作例にも見かけることがないが、「ふみとめる」に該当する馬の手綱を足駄で踏みとめる女性はかつて国芳自身が描いて評判となった「近江の国の勇婦於兼」を題材としている。「ふらせる」に当たる雨乞いする女性（深草の少将が後ろに続くことより見れば小野小町）が海面に迫り出した岩の上で差し出された傘の下で体を前傾させて雨を祈る図様も、やはりかつて国芳自身が描いた「高祖御一代略図　鎌倉霊山ヶ崎雨祈」の日蓮の姿に酷似しており、旧作を引用したものと見てよいだろう。

図５　国芳筆「うけニ入ふの字尽」　個人蔵

この「うけニ入ふの字尽」は嘉永２年（1849）８月８日の木性の有卦入りに際して描かれたものである可能性があるが、この木性の有卦入りに合わせて出された有卦絵は現在８例を数えることができ、有卦絵の出版がこの年から本格的に始まったことを推測させる。８例の絵師は国芳（２）、芳虎（３）、芳藤（１）、二代国盛（２）で、国芳門を中心とした歌川派ですべてを占めている。その図様は実にバラエティーに富んでおり、以後の有卦絵のパターンの大半がこの時点で既に出そろっている感がある。中でも芳虎筆「福禄寿とふ尽くし」（個人蔵、図６）は最も標準的なパターンを示す作例で、福禄寿のまわりに袋、笛、分銅、ふくさ、藤の花、船、富士の山という「ふ」のつくもの７種を配し、「酉の八月八日酉の刻木性の人有卦に入」の標題

図６　芳虎筆「福禄寿とふ尽くし」　個人蔵

図７　芳藤筆「寄せ絵の福助」　個人蔵

と、有卦入りする年齢の一覧、「けふよりは有卦にいりえの月清し…」の句を書き加えている。

福禄寿とともに有卦絵にもっとも頻繁に描かれるのはいずれも頭に「ふ」の付く福助と福女（おたふく）であるが、嘉永２年の時点で両者を描く作例は４例を数え、既に主役的存在である。福助福女を描く作例にも筆や福寿草などの「ふ」尽くしが織り込まれ、「福という福は福徳福の神　福禄ふく寿福来るなり」といった福に関わる歌が書き込まれることが多い。中でも眉毛を筆、眼をふぐというように「ふ」尽くしの寄せ絵で描かれた芳藤筆「寄せ絵の福助」（個人蔵、図７）は、遊び心にあふれた傑作といえるだろう。

近世後期に出現した福神である福助の由来については諸説があるが[18]、『俚言集覧』（寛政３年・1791刊）の「頭の大なる人形此土偶寛政年中製し出す」という記述や、『享和雑記』の「叶福助といふ人形、其始山城の伏見にて焼出せし由、享和の頃に到りて江戸にて流行出し…」という記述を合わせて考えると、まず18世紀末に上方で流行が始まり、19世紀の初頭に江戸に伝わったものであるらしい。大きすぎる頭という奇形性は福神の要件にかない、福助も福女も「ふ」の字で始まるところから、有卦絵のメインキャラクターになったのだろう。福助は一種の流行神と考えられるが、有卦絵の出版が本格的に始まった嘉永２年には、お竹大日如来、新宿正受院の奪衣婆、日本橋翁稲荷の流行があり、国芳一門らによってそれらの流行の様子が錦絵に多数描きとどめられている[19]。これらの流行神と福助の間に直接の関係は知られていないが、流行神福助をメインキャラクターとする有卦絵の出版が、お竹大日などの流行と

図８　芳藤筆「寄せ絵の福禄寿」　個人蔵

図９　二代国貞「有卦入冨寄」　個人蔵

図10　三代豊国「有卦に入る和合之福神」　個人蔵

同じく嘉永2年から本格化するのは、偶然の一致とは思われない。

嘉永2年以降の有卦絵については改印によっておよその刊行月が判明するが、次の嘉永5年（1852）11月6日の火性の有卦入りを祝う有卦絵の場合、5月の改印が2点、6月7月9月が各1点、10月が2点とまちまちで、必ずしも有卦入り直前の刊行ではないことが分かる。この中では芳藤筆「寄せ絵の福禄寿」（個人蔵、図8）と役者似顔風の二代国貞筆「有卦入冨寄」（個人蔵、図9）が秀逸である。前者はフグ、房、袋、笛などを寄せて福禄寿を描き、後者は不破伴左右衛門、藤娘、芙蓉方（木下蔭狭間合戦）、文売（七重咲浪花土産）、鱶七（妹背山婦女庭訓）、筆助（箱根霊験躄仇討）、深草の少将（通い小町）という「ふ」の付く七つの役柄を描いている。また、三代豊国筆「有卦に入る和合之福神」（個人蔵、図10）も歌舞伎に取材するもので[20]、当代の人気役者であった八代目市川団十郎と初代坂東志うかの二人を、近世後期の流行神である和合神に見立てた異色作である。

嘉永5年出版の有卦絵の中で問題を残すのは国芳筆「歳徳神と福助」（埼玉県立博物館蔵、図11）である。嘉永5年2月以降の改印であれば名主双印に年月印を加えた3印が捺されるはずであるが、この作例には年月印が見あたらないからである。名主双印だけとすれば正月の改印であった可能性も考えられるが、この年の他の作例はいずれも年末に近い11月の有卦入りに合わせた5月以降の改印である。後述する例のように、前回の嘉永2年の有卦絵の重版である可能性が強いが、断定は難しい。後考を待ちたい。

安政2年（1855）は2月10日が金性の有卦入りに当たったが、金性の有卦入りは必ず年初に近い2月にあるため、有卦絵が前年の暮れに出されることもあった。この年のものでは、白と黒のヒョウタン（ふくべ）で後ろ姿の福女をあらわした広重筆「寄せ絵の福女」（個人蔵、図12）がしゃれている。

安政5年（1858）5月8日の土・水性の有卦入りを祝うものは13例の多数が確認される。三代豊国筆「ふ尽しの顔見世番付」（江戸東京博物館他蔵、図13）

図11　国芳筆「歳徳神と福助」　埼玉県立博物館蔵

や国芳筆「有卦福曳の図」（個人蔵、図14）はともに２枚続きの大作でありアイデアも素晴らしい。このあたりが有卦絵の最盛期であろう。後者には背景の富士と福引きの親を務める福禄寿に加え、「ふ」で始まる事物が実に40種も描かれている。

文久元年（1861）８月５日の木性の有卦入りに関わるものでは、福助を由良之助に見立てた芳幾筆「福助の見立て忠臣蔵七段目」（個人蔵、図15）が機知に富んでいる。縁の下で密書を盗み読むのはフグである。また国芳筆「有卦無卦十二運略説」（個人蔵、図16）も注意すべき作例である。この作品は木性の有卦絵であることと列記された年齢から、文久元年８月の有卦入りに際しての作例と見て間違いないのだが、改印は安政５年４月のものである。すなわち３年前の有卦絵を転用し、文字部分のみを彫り改めて再び売り出した重版なのである。さらにこの作品には「世俗にうけむけのこと其訳しりたる人少し/先うけにいりたる年は…」と有卦の簡略な説明が記されているが、当時の人々の多くが有卦無卦説の内容を必ずしも正しく理解していなかったことを伝えて興味深い。

図12　広重筆「寄せ絵の福女」　個人蔵

次の元治元年（1864）11月15日の火性の有卦入りを祝うものについてもこの改版再販の例が４件確認されるが、こうした例の増加は絵師たちの新たな図様を生み出す創造力の枯渇を示すのであろうか。中でも「有卦福曳の図」（個人蔵、図17）は、安政５年に国芳が描いた傑作を、国芳没後に弟子の芳虎がそのまま拝借して自分の署名を入れた怪作である。好寅筆「御婦しの粉」（個人蔵、図18）もそうした改版再販の一例であるが、お歯黒に使う五倍子粉（ふしこ）を宣伝する引札を兼ねるために、同じ図柄が踏襲されたのであろう。

幕末の慶応３年（1867）という動乱期にも、２月７日の金性の有卦入りを祝う作例が10例近く確認される。藤よし筆「扇子を持つ福助」（江戸東京博物館・他蔵、図19）は秀作であるが、

図13　三代豊国筆「ふ尽くしの顔見世番付」　江戸東京博物館蔵（資料番号9020 3540）

図14　国芳筆「有卦福曳の図」　個人蔵

図16　国芳筆「有卦無卦十二運略説」　個人蔵

図15　芳幾筆「福助の見立て忠臣蔵七段目」　個人蔵

図17　芳虎筆「有卦福曳の図」（部分）　個人蔵

図18　好寅筆「御婦しの粉」　個人蔵

図19　藤よし筆「扇子を持つ福助」　江戸東京博物館蔵
（資料番号96200346）

図20　藤よし筆「吹き矢に興じる福助」　江戸東京博物館蔵
（資料番号96200347）

この寄せ絵の福助は自身の旧作（図７）のヴァリエイションである。同じく藤よし筆の「吹き矢に興じる福助」（江戸東京博物館蔵、図20）には、吹き矢の的の書き割りに筆を帆柱にした舟が見えるが、先述した有卦舟を描いたものかと思われる。

有卦絵は明治３年（1870）５月17日の土・水性の有卦入りに際しても売り出されているが、筆者は明治６年と９年の作例をまだ目にしたことがない。いまだ目が十分に行き届いていないのは言うまでもないが、明治５年に断行された太陽暦への突然の移行が、旧暦と深く関わる有卦入りの習俗に大きな打撃を与えたことは間違いないだろう。改暦に象徴される文明開化とともに、有卦入りを祝うという迷信も影をひそめたかに見えた。

しかし、有卦絵は江戸とともに消え去ったのではなかった。ほどなく有卦絵は復活し、明治12年から30年までは３年ごとに数種の有卦絵が刊行され、20世紀に入った明治39年の作例さえ確認できるのである。その多くは福助と福女を並べて描く定型的なものであり、新たな展開を見せるものは少ないが、福助が馬車を御したり、福禄寿が気球（風船）に乗るといった新時代の風俗を描くものなどがあって興味深い。

４　有卦絵の特色

以上年代を追って有卦絵の変遷をたどってみたが、その中でいくつか気づかれた点をまとめておきたい。

まず有卦絵を描いた浮世絵師についてであるが、現在知られている作品の大半は歌川派の浮世絵師の手になるものであり、特に国芳一門の活躍が著しい。国芳は最初期の有卦絵の原型をつくったと考えられ、有卦絵が初めてまとまって出版された嘉永２年においても主導的な役割を果たしている。弟子の芳藤、芳盛、芳虎、芳幾らも有卦絵を複数描いており、国芳とその一門が有卦絵をリードしたことは間違いない。国芳の兄弟子である国貞とその一門の国盛、国周、国麿、さらに同じ歌川一門である広重と重宣（二代広重）なども有卦絵の筆をとっており、歌川派全盛の当時の浮世絵界の構図がそのまま反映された形である。

有卦絵の本格的な出版が始まった嘉永２年には、お竹大日如来をはじめとする流行神の浮世絵も多数出版されているが、これらの時事的な画題についても、国芳とその一門がそのほとんどを描いている。やはり近世後期に流行し、近年注目を集めている拳遊びを描く錦絵[21]の場合も国芳門が中心となっているし、絵師不詳であるものが多い鯰絵についても国芳門下の関与を想定する意見が強い。美人画や風景画などの浮世絵本来の画題にこだわらず、広く庶民の要求に応じて時事的な画題も積極的に描こうとした国芳の野心的な姿勢がうかがえる。

ただこれらの時事的な画題の中にあって、流行神や拳遊びを描くものなどには、突然の大量出版であったためかやや類型的な作例も混じるのに対し、有卦絵の場合は３年ごとの有卦入りの日があらかじめ決まっていたこともあり、構想やモチーフに十分工夫を凝らしたものが多い。

特に寄せ絵のような遊び絵の趣向を取り入れた機知に富む図様が目立ち、めでたさを表現しようとする絵師の意欲が感じられる。ただ、先述したように、幕末近くには重版の作例も目立つようになる。優れた構図・アイデアのものは繰り返し使おうという版元の商魂のあらわれでもあったのだろうか。

描き込むモチーフの選択にも絵師の苦心がうかがえる。有卦絵に描かれた「ふ」の付くモチーフを整理しておくと、最も頻繁に描かれたのは福助福女と福禄寿であるが、人物としては深草少将、鱶七、不破伴左衛門、芙蓉方、文売り、筆助、藤娘、福岡貢、藤川水右衛門といった歌舞伎の役柄や、八犬伝中の登場人物である船虫や伏姫などが描かれている。いずれも当時の江戸庶民のよく知る人気キャラクターであったのだろう。忠臣蔵の有名な場面に想を得たものや人気役者の似顔を取り込んだ作例も多く見られ、浮世絵一般と同様に歌舞伎とのつながりは深い。事物としては富士、筆、フグ、瓢、二股大根、福寿草、袋、藤、舟、福良雀、分銅、笛などが頻繁に登場し、そのほか房、ふくさ、文箱、鮒、梟、風鈴、ふきん、蕗、ふろしきなど、「ふ」で始まる日常のあらゆるものが描かれている。「ふ」の字が富や福につながるという単純な発想によるものと思われるが、実に卑近な事物がめでたいものとして取り上げられている。近世の庶民信仰には、疱瘡神が「去る」あるいは「去ぬ」ことを期待して疱瘡絵に猿や犬を描くといった、語呂合わせに類する言葉の迷信がしばしば見受けられるが、「ふ」のつくものがめでたいというのも同種の発想であり、明確な典拠に基づかぬ庶民信仰の曖昧な性格をよく示すものと言える。

本来の祈願の対象であるべき神仏については、流行神である福助福女と七福神の一つである福禄寿の他に、不動明王を描いた作例が少数あるが、同じく頭に「ふ」が付くものの、普賢菩薩や不空羂索観音のような伝統的な権威ある仏尊がほとんど描かれない点は注意すべきであろう。麻疹絵や疱瘡絵を見ても、疫病よけの祈願の対象となるのはスサノヲのような神話の神であったり、武勇で知られた源為朝や加藤清正などの神に類するものであることが多く、仏はほとんど描かれることがない。庶民に親しまれた観音や不動明王などは別として、如来や菩薩などの仏教の崇高な尊像は、庶民の日常の祈願の対象にはなりにくかったものと思われる。逆に近世の庶民信仰における神の役割の大きさについては、今後さらなる検討が必要と思われる。

近世は宗教（仏教）が堕落した時代であると言われるが、庶民レヴェルでみれば、宗教（仏教）がもっとも暮らしに根づいた時代であったと言うことができるだろう。本稿で取り上げた有卦入りに関わる習俗は、宗教心というより迷信に類するものではあるが、科学的で合理的な近代の思考法がひろがる直前の、信心深かった江戸庶民の素朴な心情をうかがうことのできる貴重な事例なのである。

【註】

1）特別展「江戸の遊び絵」では31点、特別展「浮世絵師たちの神仏」では16点の有卦絵作品が出品さ

れた。なお本稿は、特別展「江戸の遊び絵」の図録に収載された拙稿「めでたさの図像――七福神と有卦絵について――」を加筆訂正したものである。

2）納音については『和漢三才図会』等にその一覧と各種の割り出し法が載っている。一例を示すと、まず十干については甲・乙は1、丙・丁は2、戊・己は3、庚・辛は4、壬・癸は5の数字を当てる。十二支については子・丑・午・未は1、寅・卯・申・酉は2、辰・巳・戌・亥は3を当てる。二つの数字を加え、もし和が6以上であれば5を引く。以上の操作で得られる数字の、1は木性、2は火性、3は土性、4は金性、5は水性にそれぞれ該当する。庚申を例にとると、庚が4、申が2であるから和は6、5を引いて1が得られる。すなわち木性である。

3）中村璋八・藤井友子『五行大義全釈』（明治書院　1986年）

4）『三世相』では、長、沐、冠、臨、帝、衰、病、死、墓、絶、胎、養と移る12運が説かれている。

5）『三才図会』時令二巻に見える記述は12運を説くものではなく、他と少し趣が異なっている。水性部分を引用すると、「一白貪狼居坎属水申酉戌亥子年月為有気逢辰年月入墓凶　入中宮不作坎方暗建殺　一白入中宮不作中宮受剋殺」。

6）中村璋八『日本陰陽道書の研究』（汲古書院、1985年）に翻刻されている。

7）註6）に同じ。

8）橋本萬平・小池淳一『寛永九年版大ざっしょ』（岩田書院、1996年）

9）『続群書類従』33の下。

10）『川越市史』史料編、近世II、P80。

11）『貞享解造暦集要』は遠藤克己『近世陰陽道史の研究』（新人物往来社　1994年）に引用されるものであるが、原典は確かめ得なかった。

12）西川如見『町人嚢』（享保4年・1719）

13）『日本庶民文化史料集成』13、1977年。

14）国書刊行会より刊行。巻第八十七暦占部「うけむけ」の項に詳しい記述がある。

15）10世山田徳兵衛『吉徳人形ばなし』（湖北社、1980年）。有卦舟に関しては、吉徳コレクション資料室長の小林すみ江氏より教示を受けた。

16）鈴木勝忠『未刊雑俳資料』第十一期の9に翻刻。有卦に関わる雑俳等に関しては、石川一郎編『江戸文学俗信辞典』（東京堂出版、1989年）に詳しい。

17）特別展「文字絵と絵文字の系譜」（渋谷区立松濤美術館、1996年）の図録番号IV－27。

18）荒俣宏『福助さん』（筑摩書房、1993年）他。

19）流行神を描いた錦絵については、南和男『幕末江戸の文化』（塙書房、1998年）や、特別展「浮世絵師たちの神仏――錦絵と絵馬に見る江戸の庶民信仰――」（渋谷区立松濤美術館、1999年）などを参照。

20）服部幸雄「和合神の図像」（『月刊百科』318・319号、1989年）

21）拳遊びの浮世絵については、セップ・リンハルト『拳の文化史』（角川書店、1998年）に詳しい。

［付記］
稿を終えるに当たり、執筆の機会を与えていただいた宮田登先生、御助言御協力をいただいた悳俊彦氏、稲垣進一氏、小島保美氏に御礼申し上げます。

有卦絵リスト

No.	題　　名	絵　　師	改　　印	当　該　年	所　　蔵
1	三宝に坐る福助	一勇斎国芳	極単印	天保２年２月８日金性	個人蔵
2	うけ祝ひ句競	豊国	名主単印	天保14～弘化４	神奈川県立歴史博物館
3	うけニ入ふの字尽	一勇斎国芳	名主双印	嘉永２年か？	個人蔵
4	さかづきおうけたおふく	一勇斎国芳	名主双印	嘉永２年８月８日木性	都立中央図書館
5	福禄寿とふ尽し	一猛斎芳虎	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
6	福女と福助	一猛斎芳虎	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
7	四福神	一龍斎（二代国盛）	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
8	福助福女福禄寿の拳遊び	一宝斎（二代）国盛	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
9	寄せ絵の福助	一鵬斎芳藤	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
10	福助福女の端唄	一猛斎芳虎	名主双印	嘉永２年８月８日木性	個人蔵
11	ふく尽うけに大入	一勇斎国芳	名主双印	嘉永２年８月８日木性	未確認
12	歳徳神と福助	一勇斎国芳	名主双印、嘉永２年＊	嘉永５年11月子の日火性	埼玉県立博物館
13	寄せ絵の福禄寿	芳藤	嘉永５年５月	嘉永5年11月６日火性	個人蔵
14	福助とおふくの祝言	一秀斎芳勝	嘉永５年５月	嘉永５年11月６日火性	未確認
15	有卦に入る和合之福神	（三代）豊国	嘉永５年６月	嘉永５年11月６日火性	個人蔵
16	ふの字	松葉楼国麿	嘉永５年７月	嘉永５年11月６日火性	個人蔵
17	福仲間を呼ぶ福助	鶯斎梅児	嘉永５年９月	嘉永５年11月６日火性	個人蔵
18	有卦入冨寄	（三代）国貞	嘉永５年10月	嘉永５年11月６日火性	個人蔵
19	福禄寿の宝船	一貫斎直久	嘉永５年10月	嘉永５年11月６日火性	個人蔵
20	福助福女の錣曳き	一恵斎芳幾	安政１年12月	安政２年２月10日金性	個人蔵
21	ふみ使	芳綱	安政１年12月	安政２年２月10日金性	たばこと塩の博物館
22	有卦七人	広重	安政２年１月	安政２年２月10日金性	神奈川県立歴史博物館
23	福助と福女の首引き	一勇斎国芳	安政２年１月	安政２年２月10日金性	個人蔵
24	寄せ絵の福女	広重	安政２年１月	安政２年２月10日金性	個人蔵
25	福禄寿の来迎	一寿斎芳員	安政２年１月	安政２年２月10日金性	個人蔵
26	奴姿の福助	広重	安政２年１月	安政２年２月10日金性	江戸東京博物館
27	福助と福禄寿のにらめっこ	一勇斎国芳	安政５年２月	安政５年５月８日土水性	未確認
28	ふ尽しの顔見世番付	（三代）豊国	安政５年３月	安政５年５月８日土水性	江戸東京博物館・他
29	風流見立福づくし	一鶯斎国周	安政５年３月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
30	船上で文を持つ役者	国周	安政５年３月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
31	福の字	重宣	安政５年３月	安政５年５月８日土水性	未確認
32	船上の福助、福女、福禄寿、藤娘	重宣	安政５年３月	安政５年５月８日土水性	未確認

No.	題　　名	絵　　師	改　　印	当　該　年	所　　蔵
33	御婦しの粉	好寅	安政５年３月＊	元治１年11月15日火性	個人蔵
34	ふの字づくしのいはひうた	（三代）豊国	安政５年４月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
35	有卦福曳の図	一勇斎国芳	安政５年４月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
36	馬を曳く福助	一勇斎国芳	安政５年４月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
37	福の面	一登斎芳綱	安政５年４月	安政５年５月８日土水性	個人蔵
38	有卦無卦十二運略説	一勇斎国芳	安政５年４月＊	文久１年８月５日木性	個人蔵
39	有卦福曳の図	芳虎（国芳）	安政５年４月＊	元治１年11月15日火性	個人蔵
40	福助の植木売り	一鶯斎国周		文久１年８月５日木性	吉徳資料室
41	福助と福禄寿の挨拶	国芳	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
42	覗き見する福神	（二代）広重	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
43	福助福女の宝船	一鵬斎芳藤	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
44	富士を背にする福助と福女	一恵斎芳幾	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
45	福助の見立て忠臣蔵七段目	一恵斎芳幾	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
46	ふ尽しの床飾	（二代）広重	文久１年７月	文久１年８月５日木性	個人蔵
47	寄せ絵の福助２	一鵬斎芳藤	文久１年７月	文久１年８月５日木性	未確認
48	船橋次郎左エ門・藤娘・福岡貢	一恵斎芳幾	文久１年７月	文久１年8月５日木性	未確認
49	見立て忠臣蔵七段目	一恵斎芳幾	文久１年７月＊	元治１年11月15日火性	個人蔵
50	福助福女福禄寿の宴会	一恵斎芳幾	文久１年７月	元治１年11月15日火性	個人蔵
51	ふ尽くしの持参もの	一恵斎芳幾	文久１年７月＊	慶応３年２月７日金性	未確認
52	ふ尽しの貼交	（二代）広重	文久１年７月＊	元治１年11月15日火性	神奈川県立歴史博物館
53	寿の掛け軸	芳年	元治１年10月	元治１年火性	個人蔵
54	七福神宝遊	国周	元治１年10月	元治１年11月15日	江戸東京博物館・他
55	福助福女の身振りふの字	一梅斎芳春	元治１年10月	元治１年11月15日火性	個人蔵
56	福禄寿と書した衝立	藤よし	元治１年10月	元治１年11月15日火性	未確認
57	福助福女と大黒	国綱	元治１年10月	元治１年11月15日	未確認
58	雪山を袋に受ける福助	一光斎芳盛	元治１年10月＊	慶応３年２月７日金性	江戸東京博物館
59	福助と歳徳神	一光斎芳盛	元治１年10月＊	慶応３年２月７日金性	江戸東京博物館
60	福禄寿の獅子舞	一藝斎芳富	元治１年10月＊	明治３年５月17日土水性	江戸東京博物館・他
61	七福即生開運有卦に入木	藤よし	元治１年11月	元治１年11月15日火性	都立中央図書館
62	文を書く娘	立斎（二代）広重	慶応２年11月	慶応３年金性	個人蔵
63	屋根船に乗る福神	一恵斎芳幾	慶応２年11月	慶応３年２月７日金性	個人蔵
64	大杯を飲む福助	立斎	慶応２年12月＊	明治３年５月17日土水性	個人蔵
65	寄せ絵の福女	藤よし		慶応３年２月７日金性	都立中央図書館

No.	題　　名	絵　　師	改　　印	当　該　年	所　　蔵
66	酒を酌む福助	（二代）広重	慶応３年１月	慶応３年２月７日金性	個人蔵
67	扇子を持つ福助	藤よし	慶応３年１月	慶応３年２月７日金性	江戸東京博物館・他
68	福助の見立てひょうたん鯰	惺々暁斎	慶応３年１月	慶応３年２月７日金性	個人蔵
69	福助の身振りふ尽し	藤よし	慶応３年１月	慶応３年２月７日金性	個人蔵
70	三宝の上の福助福女	幾丸	慶応３年１月＊	明治３年５月17日土水性	未確認
71	吹き矢に興じる福助	藤よし	慶応３年１月	慶応３年２月７日金性	江戸東京博物館
72	吹き矢の的	了古	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
73	有卦入り七福めぐり	一恵斎芳幾	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
74	福助と福禄寿のにらめっこ	芳年	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
75	拳の勝負	国周	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
76	踊る福助	幾丸	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
77	馬車を御す福助	一恵斎芳幾	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵
78	ふ尽しの端唄	国周	明治３年４月	明治３年５月17日土水性	個人蔵

明治３年までのものに限定。

改印の項の＊印は、該当する有卦入り年を遡るものであること、すなわち改版再販であることを示す。

所蔵の項の未確認は、図版や写真のみの確認で実作品を確認していないことを示す。